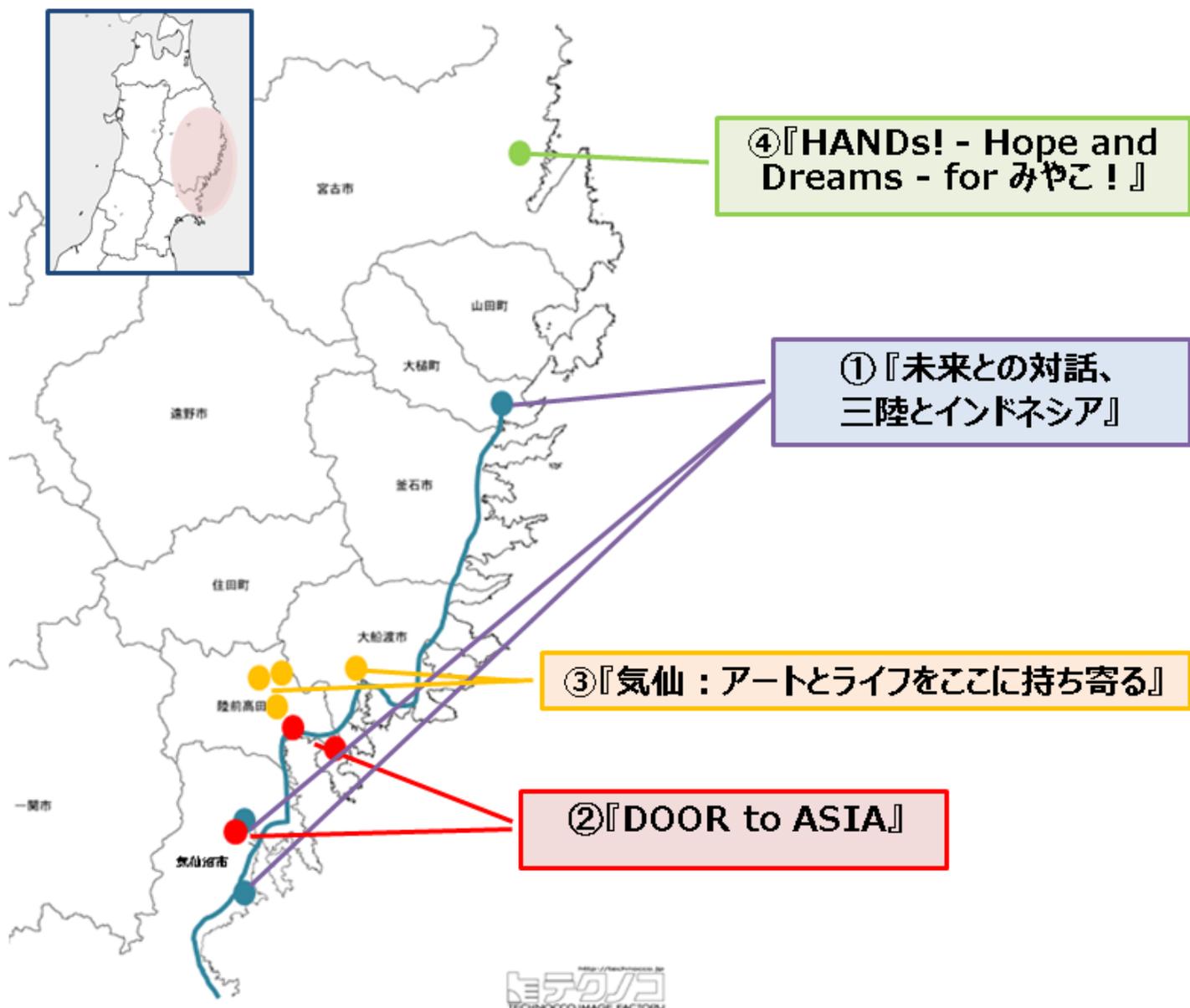


「三陸国際芸術祭」 国際交流基金アジアセンター連携企画 「三陸×アジア」つながるプロジェクト 概要資料

国際交流基金アジアセンターは、「三陸国際芸術祭 2019」における連携企画として「三陸×アジア」つながるプロジェクトを各種実施します。国際交流基金アジアセンターがこれまで実施・支援してきた事業を、三陸沿岸地域でさらに拡大もしくは展開させ、国際交流を通じて浮かび上がる郷土芸能に限らない三陸地域の魅力を発信することを目的としています。



0080A4CM21[この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の詳細地図Z000(地図画像)]を使用した。承認番号 平成22第使 第632号

■未来との対話、三陸とインドネシア

<http://www.taiwa.or.jp/aceh-japan/sanriku/>

主催：独立行政法人国際交流基金アジアセンター、非営利活動法人地球対話ラボ

2004年のスマトラ沖地震の被災地であるインドネシア・アチェと三陸を結ぶプロジェクト。アチェで震災復興と向き合う人々を三陸に招へいし、地域の人々と交流。その体験を踏まえてそれぞれの震災の一面にふれ、「外」の視点から生まれる気づき・共鳴を「未来への対話」として発信します。

【主なプログラムとみどころ】

◆アートツアー「想いにふれる せかいが広がる どこでもピントウさんぽ in 三陸」

被災地ツーリズムの取り組みが盛んなアチェでは、震災遺構である発電船博物館の年間入場者が45万人にも上る。そのアチェ州より文化観光局副局長や、アチェでコミュニティアートに携わる若者らを迎え、気仙沼市や三陸国際芸術祭開催エリアを巡ります。文化的背景を異にする者が、震災を体験した地域同士ということで出会い、震災のこと、お互いの社会について再発見し「せかい」を広げていく旅。「ピントウ」はインドネシア語で「入り口」のこと。

<日程> 2019年3月13日～19日（予定）

◆交流トーク会「三陸とアチェ、未来への対話」

上記アートツアー参加者と、東日本大震災を伝える常設展を設置した山内宏泰氏(リアス・アーク美術館副館長/学芸員)によるトーク会。積み重ねてきた経験を共有することで、震災という同じ体験をした者どうしが地域や時間をこえて未来へ向けた対話を行います。

交流トーク会前日には、大槌町やアチェの紹介を中心とした映像を見ながら、おしるこやアチェの名物焼きそばをつくって食べる交流会も開催。

<日程> 2019年3月17日（日）10:00～15:00

<会場> 大槌町文化交流センター(おしゃっち) ※2018年6月にオープン

◆「気仙沼のインドネシア人」

気仙沼市にすむインドネシア人技能実習生（約200人）の一部のポートレイト的ビデオ作品を現代アーティスト門脇篤が制作。彼らの目を通して見える三陸や日本、そしてインドネシアを伝えます。展示会場となるのは気仙沼図書館・ユドヨノ友好こども館と歓迎ビレッジ。同施設はインドネシアの援助でつくられたこどもの本や読み聞かせコーナーをもつ施設。2019年2月に魚市場付近に完成を予定している歓迎ビレッジ（仮称）は、気仙沼の地元企業などが中心になり、「持続的な友好関係のためには文化理解が必要」との考えから、インドネシア料理店やモスク、銭湯を擁する国際交流文化拠点。

<会期> 2019年3月2日～3月24日

<展示会場> 気仙沼図書館・ユドヨノ友好こども館、歓迎ビレッジ（仮称）

◆被災地館交流絵画制作展示「15年後の気仙沼とアチェ」

15年後をテーマに気仙沼とアチェのこどもたちが共同で大きな絵を制作し、2019年3月にオープンする気仙沼市の震災遺構・向洋高校に展示します。

<会場> 震災遺構・気仙沼向洋高校コミュニティコーナー

【特定非営利活動法人地球対話ラボ】 本件に関するお問い合わせ：070 - 5015 - 7180

「地球対話」とは、インターネットテレビ電話などを使って、地球上で遠く離れた国や地域など、日常生活では出会うことが難しい人びとの間をつないで行う、同時・双方向・対面のコミュニケーション。その実感や経験から、自分が変わり、相手との関係が変わり、やがて世界が変わる、そんな交流を目指している。2002年の「アフガン対話プロジェクト」から活動を開始し、2010年に法人を設立。インドネシア・アチェと東北を結ぶ「インドネシア・アチェと東北の被災地間交流プロジェクト」を2013年から実施し、2017年からは「アチェ＝ジャパン・コミュニティアート・プロジェクト」というかたちへと発展している。

◆門脇篤

1969年仙台市生まれ。現代アーティスト。東京外国語大学アラビア語学科卒。鉄鋼会社に就職後、2年弱で退社。水彩やテンペラによる写実的な作品を描いてギャラリー等で発表をするが、2003年仙台市中心部の商店街で行われたアートプロジェクトに参加したことがきっかけで、各地でコミュニティアート型の活動を展開している。東日本大震災後は、仙台市の仮設住宅・復興住宅での「おしるこカフェ」（2012年～）や、石巻のこどもとつくる「石巻日日こども新聞」（2012年～）、アートを仕事にする福祉サービス事業所「アートインクルージョンファクトリー」（2013年～）、震災後の多様な表現を発信していくアートレーベル「STARToHoku」（2013年～）、スマトラ沖地震の被災地インドネシア・アチェとの被災地間国際交流企画「アチェ＝ジャパン・コミュニティアート・プロジェクト」（2017年～）などの企画・運営を行っている。

◆渡辺裕一

1962年北海道生まれ。映像作家、プロデューサー。ドキュメンタリー制作、ビデオジャーナリスト活動を経て、アフガン戦争後の「2002年日本とアフガンの高校生テレビ電話対話」から双方向映像や対話の可能性を追究する。東日本大震災以降は被災地の情報交流・発信の支援に取組み、日本で初めて全国テレビ放送で1年間のパブリックアクセス放送「東日本大震災・いま私たち市民にできること」を実現（2011年度BS11）。その他「NHKスペシャル／福島をいま知っていますか」（NHK総合2013年）等。アチェには、2004年スマトラ沖地震直後に取材に入り、中央政府との内戦を終結させた津波や、負の被災体験がプラスに転じる「発信」についての映像記録を続けている。近年は、震災遺構や震災伝承を、VR映像を活用して、遠く離れた場所でもかにかに共有できるのか、その方法や理論の確立を始めた。特定非営利活動法人地球対話ラボ理事・事務局長。

◆中川真規子

文教大学大学院国際協力学専攻科修了。2013年4月～2016年3月までタイの在外教育施設（日本人学校）で教諭として勤務。社会科副読本「わたしたちのシラチャ」製作。2016年6月からフィリピンの現地旅行会社勤務。いわゆる「観光」では訪れないような離島地域へのスタディツアー、ローカルの人々と日本人の国際交流や学びの場づくりを行う。特定非営利活動法人地球対話ラボ理事。

■DOOR to ASIA <https://door-to.asia/>

主催：独立行政法人国際交流基金アジアセンター、一般社団法人 つむぎや

「DOOR to ASIA」は、アジア各国のデザイナーが三陸地域に滞在し、地元事業者と自国をつなぐための“コミュニケーションデザイン”を制作するデザイナーズ・イン・レジデンス・プログラムです。日本を含むアジア 11 か国から延べ 33 名のデザイナーが三陸地域を訪れ、地元事業者の店舗や工場での就労体験や経営者の自宅でのホームステイ等、濃密な交流を経て、「課題発見→解決」に至るコミュニケーションデザインを提案。実際にアジアのデザイナーたちと国を越えた協働をはじめた事業者も多くいます。2019 年 3 月には、これまでの交流の成果を地域住民の方に広く紹介するとともに、未来へ向けた交流の場づくりに向けた多面的なイベントを実施します。

【主なプログラムとみどころ】**◆DOOR to ASIA : COMMUNICATION DESIGN EXHIBITION**

気仙沼と陸前高田の 2 か所で、33 名のデザイナーたちによるコミュニケーションデザイン提案を展示します。DOOR to ASIA の交流をきっかけに生まれた新しいつながりと、その後の可能性を地域の方々に広く紹介する機会とします。

<日程> 2019 年 3 月 13 日 (水) ~ 21 日 (木)

<会場> アバッセたかた (陸前高田市) 及び、未定 (気仙沼市)

◆DOOR to ASIA : TALK SESSIONS

来日したアジアデザイナーたちによるトークイベントを開催。プログラム参加当時の感想、デザイン提案までのプロセス、コミュニケーションデザインに込めた願いや想いなどについて話してもらいます。

<日程> 2019 年 3 月 20 日 (水) / <会場> 未定 (気仙沼市)

3 月 21 日 (木・祝) / <会場> 交流施設ほんまるの家 (陸前高田市)

◆箱根山フェスティバル

2018 年の受入事業者である株式会社箱根山テラス及び酔仙酒造株式会社、その他の過去事業者らと連携し、未来につながるフェスティバルを開催します。アジアのデザイナーが創り出す祝祭空間で、アジア各国のシェフが三陸の豊かな恵みを素材に自国のアレンジを加えた料理をふるまいます。

<日程> 2019 年 3 月 23 日 (土) / <会場> 箱根山テラス (陸前高田市)

◆子ども向けワークショップ

箱根山フェスティバルのイベントの一つとして、気仙沼の子どもたちにデザイン教育を行っている Pensea Next Switch と連携し、アジアのデザイナーたちと地域の子どものためのデザインワークショップを実施します。地方ではあまり機会のないデザイン教育と、国際交流の場を提供します。

<日程> 2019 年 3 月 23 日 (土) / <会場> 箱根山テラス (陸前高田市)

【過去の参加事業者】※ () 内は、活動当時の所在地

2018 : 株式会社カネマ (気仙沼市)、酔仙酒造株式会社 (大船渡市)、株式会社箱根山テラス (陸前高田市)

2017 : 三陸とれたて市場 (大船渡市)、LAMP (陸前高田市)、ピースジャム (気仙沼市)、横田屋本店 (気仙沼市)

2016 : デクノボンズ (一関市)、齊吉商店 (気仙沼市)、男山本店 (気仙沼市)、陸前高田市役所商工観光課 (陸前高田市)

2015 : 株式会社石渡商店 (気仙沼市)、株式会社オノデラコーポレーション (気仙沼市)、

株式会社八木澤商店 (陸前高田市)、Three Peaks (陸前高田市)

【過去の招へいデザイナーの出身地】

タイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、韓国、中国、台湾、インド、シンガポール、ベトナム、日本

【一般社団法人つむぎや】 本件に関するお問い合わせ：info@door-to.asia

2014年より4年間、毎年夏に三陸地域でこのプログラムを国際交流基金と共催。その後、DOOR to ASIAのコンセプトをもとに、奈良県・奥大和エリアではアジアデザイナーと地元デザイナーの協働によるプロジェクトや、JR山手線を媒体にした東京の魅力を海外デザイナーの視点で発掘する東日本旅客鉄道株式会社とのプロジェクト、「海外個人旅行者との交流型観光」のあり方を提案する長野県小布施町とのプロジェクトを展開している。

◆友廣裕一（企画運営）

一般社団法人つむぎや代表理事。大学卒業後、「ムラアかりをゆく」と題した日本全国70以上の農山漁村を訪ねる旅を通じて、各地の暮らしや仕事について学ぶ。その後は個人事業主としてご縁のあった地域の方々と活動していたが、2011年3月からは宮城県石巻市で活動。現在は東北をはじめ、各地で地元の人たちと場づくりからモノづくりまで行う。主に事業のプランニング・ディレクション等を担当。

◆矢部幹治（デザイン・コーディネーター）

AGENT HAMYAK 株式会社代表。ロンドンのクリエイティブエージェンシーで8年間勤めた後、2013年に東京に戻り、アーティストマネジメントエージェンシー AGENT HAMYAK を設立。企業広告などのアーティストマネジメントのみならず、プロジェクトマネージャー、デザインリーダーとして多くの国際プロジェクトに携わっている。台湾高雄市の CREATIVE CITIES の日本担当キュレーター、日本とシンガポール両政府との共同プロジェクト『共 KYO』（日本の職人とシンガポールデザイナーとの共同プロジェクト）など。

■気仙：アートとライフをここに持ち寄る

主催：独立行政法人国際交流基金アジアセンター、なつかしい未来創造株式会社

アジアのアーティスト、クリエイターおよび地域の人々とともに作りあげる参加型アートイベントを開催します。なつかしい未来創造株式会社が2013年から展開する「陸前高田アーティスト・イン・レジデンス（以下、陸前高田 AIR）*」事業と協力。アジアの人々と地域住民が出会い、暮らしのなかにあるアートを再発見し、国際的な対話の場を作り出すことによって、これからの未来の環境、コミュニティのあり方について多くの人々と共有し、共に考え、行動していくことを目的とします。

*陸前高田 AIR：国内外のアーティストおよび研究者を招へいし、滞在中のリサーチ、創作活動、地域交流の場を設けている事業。これまで日本を含む7か国から14人が参加。

【主なプログラムとみどころ】

◆「気仙アート&ライフマルシェ」

気仙地区のほか、岩手県内外のものづくりを行う、誰もが参加できるマルシェ（フリーマーケット）を開催。陸前高田 AIR で一定期間、気仙地域で暮らしたアーティストも共に参加。アジア料理の試食も提供します。

<日程> 2019年3月24日（日） / <会場> 県営栃ヶ沢アパート集会所

◆こどもワークショップ「アジアン・キッズのホームキッチン<お弁当をつくろう>」

気仙地区のこどもたちが主体となり、ものづくりを通して、アジアの多様な文化を理解し、交流するワークショップを NPO 法人「こどもアート企画 MOTTO」と開催。“キッズファシリテーター”に認定されたこどもたちが、気仙アート&ライフマルシェで成果発表を行い、一般参加のこどもたち対象のワークショップを自ら運営します。

<日程> 2019年1月～2月の週末および3月24日（日） / <会場> 大船渡市内、陸前高田市内

◆展覧会「アート&ライフ スタジオ」

過去に陸前高田 AIR に参加したフィリピン、タイ、日本のアーティストが継続して行っている災害に関する文化芸術プログラム「DISPLACED: The RIKUZENTAKATA-MANILA Collaborative Art Project」の記録を公開。フィリピンの自然災害や都市の貧困地域コミュニティをリサーチした成果を踏まえ、厳しい環境と向き合っている状況を陸前高田とともに考えます。あわせて、陸前高田 AIR アーティスト、および横田在住のアーティストである ASUKA 氏とのグループ展も開催します。

<日程> 2019年3月21日（木・祝）～3月24日（日） / <会場> 旧横田小学校

◆交流&トーク会「陸前高田ミーティング横田編」

陸前高田市出身の写真家の畠山直哉氏をゲストスピーカーに迎え、陸前高田 AIR 滞在アーティストらとともに、アートとライフをテーマにクリエイションの場の可能性について探るトーク会を開催します。

<日程> 2019年3月21日（木・祝）（予定） / <会場> 川の駅よこた交流室（予定）

【ディレクション、キュレトリアルメンバー】

日本を含め世界各地で活躍するメンバーが参画します。

◆豊島秀樹（キュレーター）

1991年サンフランシスコ・アート・インスティテュート卒業。2001年チェルシー・カレッジ・オブ・アート・デザイン修了。grafの設立メンバーの一人で、2009年9月以降はgm projectsとして活動。奈良美智とのコラボレーション、A to Z projectを共同企画・制作、三沢厚彦+豊島秀樹として「あいちトリエンナーレ（2010）への参加、押忍！手芸部と豊島秀樹として金沢21世紀美術館で個展（2011）などのコラボレーションも多い。「マンガ新次元」展などの展覧会での空間構成をはじめ、数多くのイベントや場づくりのディレクションを担当。

◆コン・カブレラ/ Con CABRERA（キュレーター）

ヴィジュアル・アーティスト、インディペンデント・キュレーター。1981年フィリピン生まれ。サン・トマス大学広告デザイン学科でアートを学び、現在はフィリピン大学でキュレトリアルプロジェクトのもと博士前期資格を取得中。過去10年に多くの展覧会に参加、2011年に初めての個展

を行う。2014年に日本での短期間のレジデンシーに参加。2018年マニラ・ビエンナーレのキュレーター。

◆日沼禎子（プログラム・ディレクター）

陸前高田 AIR プログラム・ディレクター、女子美術大学教授。女子美術大学芸術学部卒業後、ギャラリー運営企画会社、美術雑誌編集者等を経て、国際芸術センター青森設立準備室、同学芸員を務める。アーティスト・イン・レジデンスを中心としたアーティスト支援、プロジェクト、展覧会を多数企画、運営、その他、さいたまトリエンナーレ 2016 ディレクター（2014～2016）、ときわミュージアムアート・ディレクター（2017～）を歴任。

◆松山隼（コーディネーター）

陸前高田 AIR コーディネーター。1985年宮城県塩釜市生まれ。東北芸術工科大学修士課程芸術文化専攻修了。同大学の助手などを経て、現職。2015年より、ウェールズの振付家・ダンサーが立ち上げた「国際ダンス交流プロジェクト Odori-Dawns-Dance」のコーディネーターも務める。近年はアーティストとの交流からタイ、フィリピンなどの海外のアート組織と協働プログラムを企画。アーティストとしても活動。

【なつかしい未来創造株式会社】 本件に関するお問い合わせ：rikuzentakata.air@gmail.com

陸前高田の経営者を中心に、株式会社ソシオエンジン・アソシエイツのメンバーを交えて、岩手県中小企業家同友会や一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワークの協力を得ながら歩みを進める「復興まちづくり会社」。地元の資源を活かしながら、社会の今日的課題に応え、将来的に約500名分の雇用を創出。複数の事業を育成し、会社自体は10年間で発展的に解散することを目指す。生活を維持し、成長・学習の機会となる「仕事」をつくり、地域内外の魅力的な人的交流を生み出す「出会い」を増やし、地域の将来的な可能性を広げる「良い社会資本」を形づくって、陸前高田の次代の子どもたちが人生を健やかに切り拓いてゆくことのできる“環境と状況”の創造に取り組む。

■HANDs! - Hope and Dreams - for みやこ!

主催：独立行政法人国際交流基金アジアセンター

共催：宮古市、宮古市国際交流協会、NPO 法人プラス・アーツ



2015/2016年フェローとしてこれまでにHANDs! (ハンズ) プロジェクト(詳細下記)へ参加した、宮古市出身の佐々木真琴さん(大学生/防災活動家 22歳)を含む、アジアで活躍する防災活動家、社会活動家などを招へいし、宮古市の若者と学びを共有し、交流することを通じて、宮古市の人々に夢と希望(Hope and Dreams)を抱いてもらうイベントです。

【主なプログラムとみどころ】

◆楽しみながら学ぶ防災教育イベント「イザ!カエルキャラバン! × HANDs! Together」

イザ!カエルキャラバン!とは、地域の防災訓練プログラムとおもちゃの交換会「かえっこバザール」を組み合わせた防災イベントで、子どもたちが楽しみながら防災の知識を身につけられる活動。今回は、実際にアジア(インドネシア等)の子ども達が使用した防災教育教材も併せて体験できます。

<日程> 2019年3月9日(土) 13:00~15:30 / <会場> イーストピアみやこ 交流スペース

◆交流&トーク会「アジアの仲間とわくわく話そう!これからの宮古 ~ゆめと船出~」

現在宮古市の抱える課題について、宮古市で活躍する人々、アジアの社会活動家の混合のグループディスカッションを行い、これからの宮古について考えます。

<日程> 2019年3月10日(日) 13:00~17:00(予定) / <会場> イーストピアみやこ 多目的ホール

【HANDs! (ハンズ) プロジェクト】 <https://www.handsproject.asia/>

本件に関するお問い合わせ: Tel: 03-5369-6025 Email: Maki_Kudo@jpf.go.jp

HANDs!プロジェクトとは、2014年より国際交流基金アジアセンターが実施する、アジアの若者がクリエイティブかつ持続可能な方法を用いた防災教育について学びあう人材育成プロジェクトで、35歳以下の防災活動家、社会起業家、クリエイター、研究者などの異業種から選抜された「フェロー」と呼ばれる参加者が、東日本大震災やアジアの被災地などを訪問し、地域に根付く災害時の記憶や防災の取り組みを学ぶプロジェクト。この学びを経て、現在までに100名のフェローが育成され、27の防災教育や被災地支援のプロジェクトが実施され、90,000名以上の人々に防災教育の種を届けています。2014~2017年度は、フェローの研修とアクションプランを実施、2018年度は、アクションプランをさらに拡大・発展させるプロジェクト数件を実施中です。

◆永田宏和 (NPO 法人プラス・アーツ 理事長 / HANDs! プロジェクト総合アドバイザー)

大学で建築を学び、大学院ではまちづくりを専攻、地域活動の礎を築く。大学院修了後は大手建設会社の竹中工務店に就職。在職した8年間で企業での仕事のいろはを学ぶ。退社後、企画プロデュース会社「IOP 都市文化創造研究所」を設立。2005年の阪神・淡路大震災10周年記念事業で、楽しく学ぶ新しいカタチの防災訓練「イザ!カエルキャラバン!」を開発したことをきっかけにNPO 法人プラス・アーツを設立。現在に至る。2012年からデザイン・クリエイティブセンター神戸(KIITO)の副センター長も務める。

◆佐々木真琴 (2015/2016 HANDs! フェロー / 大学生 / 宮古市PR隊 第1号)

宮古市出身、大学4年生。対話的パフォーマンスや物語、イラストなどを用いた幼児向けの防災教育教材の原案をつくり、プラス・アーツと共同開発。様々な防災活動に関わる傍ら、平成30年8月より「宮古市PR隊 第1号」として宮古市より任命され、食とお酒を通じて宮古市を紹介するイベント活動など幅広く宮古市の紹介活動を行う。